
カガミノムコウ

或神 枕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カガミノムコウ

【コード】

N3972Q

【作者名】

或神 枕

【あらすじ】

正義の反対は悪ではなく、正義以外の全て

少女の一言が原因となり、文虹里正義は鏡の向こうの世界“ドルワ”の存在を知る。現実世界の裏側であるドルワでは、様々なことがひっくり返る。そんな中ドルワでも何の変化もない文虹里は、自分が特別かつ特例中の特異、裏無師である事を告げられる。

謎の少女、五味玖澄を救うために文虹里はドルワでの争いに巻き込

まねていくこととなるが・・・。

この名前が災いしてか、よく「正義」という概念についてよく考える。

それはつまり最終的には多くの人が望む事を実現してくれる人物や集団に宛てられる称号であり、決して悪と対立する存在ではないと僕は考えている。悪には悪なりの正義があり、また正義にも正義なりの悪が存在するのだから。どこぞの仮面を被ってバイクを走らせる輩も、どこぞの巨大な超男も、他の命を奪う事で我々人類を救ってくれているのだ。それが人間にとって良いことだから彼らは正義の味方と賞賛されている訳である。

けれどそれは人類側の言い分であり、やられる怪獣、怪物、その他様々な奇々怪々な生物の方々からすれば単なる殺し屋である。それどころか殺人鬼である。まあ、そもそも地球を侵略するとか大それた名分を掲げている以上殺されるぐらいは覚悟するのが怪獣界の掟というものである。

・・・地球侵略するのは宇宙人で、怪獣は彼らの道具に過ぎないのでは？という素朴な感想を抱かれる方もいらっしゃるかもしれないが、無視する。申し訳ない。

ともかく、正義というものを自分の損得だけで判断するのは間違っているというのが15年間と少しを生きてきた自分の持論である。自分の損得と、相手の損得と、他人の損得とを考えて、それでいて尚も正義を名乗れるものなどこの世には皆無なんじゃないだろうか。だから正義なんて所詮子供を教育するための道具で、それこそそれは宇宙人が派遣した怪獣のように、大人たちが遣わした正義の道化

こそがあのウルト マンなのではないだろうか。

そんな風に僕こと文虹里正義ふみにじりまきよしは、常々思うのである。思っちゃっお年頃なのである。ビバ中二病。

1話 惨憺たる主人公

文虹里正義の生活は、妄想に始まり妄想に終わる。

朝の登校中は毎日欠かさず下らなくもつまらない、詮のない考え事をするのである。それは昨日見たアニメについてかもしれないし、今朝読んだ新聞の記事に対する批評かもしれないし、或いはもっともつと陳腐な内容かもしれない。それが彼の朝の日課であり生活リズムを形成する重要なキーパーツなのである。

とは言えそれは周りから見れば、単に俯きながら危なげに歩いているだけの一学生でしかなく、そんな彼が何を考えているかなど気にする人など絶対に確実に間違いなくいないであろう。それを文虹里自身も望んでいたし、それが最善で最良の選択であるはずだ。

ちなみに今日は入学式である。これは妄想ではない。

中学校の三年間の義務教育を無事に終え、過酷にして苛酷な受験を終え、のんびりとした数週間の半ニート生活も終え、今正に新たな道を歩んでいる最中なのだ！

・・・妄想しながら。俯きながら。

(まあ、高校生になったからって特別何かが変わるって訳でもないよな。正直)

自宅から少し遅いテンポで歩き続けておよそ15分。目的地である私立海無高等学校の校舎が見えてきた。やはり私立の高校ということもあって見栄えがよく、いかにもお嬢様やお金持ちの生徒が通っ

ていそうな風貌である。校内はきれいな円形になっており校舎はその中央に据えられている。この校舎も円柱状で中央の本館のような建物から3つの別の校舎に渡り廊下が繋がられ、合計4つの円柱からこの海無高校校舎は出来ている。一見すると最新のスペースシャトルにも見えなくもないが、実際のそれほど銀ギラ銀に輝いているわけでもなく地味なクリーム色で統一されている。

おそらく今日のために学生たち、そして学校教員の方々は、汗水たらしてこの美しい校舎を更に美しくするために全身全霊をかけて大掃除をしたのであろう。つまり今眼前にあるこの光景がこの学校で最も美しい光景なのであろうから、そう考えると中々趣き深かったりそうでもなかったりする。しかし、少なくとも文虹里にはそんな和をたしなむ雅やかな心は持ち合わせていないので、色とりどりに植えられた花々や外国の大広場にあってもおかしくないような噴水、そして教師の挨拶などを華麗に無視しながら玄関に向かっていった。

当然入学式なので生徒や保護者を含めかなりの人数がいるはずなのだが、校舎内はそれを感じさせない程の広さであった。それでも人ごみが苦手である文虹里にとって重要なのは人口密度ではなく純粋な人口である。周りは知らない顔ばかりな上に人見知りをするタイプの性格。平たく言えば集団に馴染むのが大の苦手。それが原因で人混みが嫌いなのだが、である文虹里の妄想はとりあえずここまでにして現実と向き合い、数少ない知り合いの顔を探すことにした。

「知り合いつつつても本当に知り合ってる程度の仲だし、別に楽しく話せるって言う事もないしな・・・。無理に探す必要もないか」

こういうタイプの人間はそれらしい理由をつけては、コミュニケーションをとる機会を減らし独りになりたがる傾向がある。このまま

では新しい友達ができる頃にはクラス替え、親友ができた頃には卒業式なんていう割りと笑えないような未来が現実になってしまいうだ。

「やあやあ文虹里。おはよう」

「ん？ おはよう糸宇^{いと}」

文虹里が探す必要もなく一人の知り合いが話しかけてきた。地味で目立たない眼鏡というマイナスのマイナスにマイナスを掛けたような文虹里に対し、糸宇こと糸宇岬^{いとつみさき}はその対極に位置するといって過言ではない。意識すれば気づく程度の茶髪をうなじ辺りまで伸ばし、男にも女にも見えるというやや反則気味な中性的で端麗な顔立と、それにフィットした少年にも少女のもどちらにも聞こえそうな声、そして何よりも自分と同じ制服を着ているのに、糸宇の方はまるで貴族の装いが如く着こなしていることに文虹里は感心するとともに驚いた。プラスは何回掛けてもやっぱりプラスなのだ。

「糸宇ってさ、何か服に愛でられてるよな」

「俺が服を愛する事はあるかもしれないが、俺が服に愛されるなんてことはないと思うぞ」

「んー、そうかな？ だってその制服、今日始めて着たとは思えなぐらい板についてるといっつか、似合ってると思うよ」

「お前、男を口説くとかなかなか良い趣味してたんだな。同じ高校に来て初めて知った」

当然文虹里はBLでも同性愛者でもないのですそのような展開は決し

てないが、それでも口が勝手に褒めてしまうほどの美青年だということが伝わればそれで重畳であろう。

「そういう台詞を女子にも言えれば少しは扱い変わるだろうに。今の言い方さらっとしてて自然だったから、俺が女だったら結構嬉しかったぜ？」

「何だ実はお前がBしたったのか。だったら歓迎だよ。君は男の娘としても見れるから僕としては全然悪くな・・・」

「・・・ってい」

直後、糸宇の拳が文虹里の腹に食い込む。真新しい紺色の制服がひしゃげ、それと同時に断末魔のような重苦しい悲鳴が校内に静かに響き渡った。幸い周りは話し声で騒々しく、文虹里が苦痛を訴えていることを知るのは糸宇1人だけであった。

「あ、相変わらずへヴィなフックだね」

「てめーの口が軽過ぎるから、俺の重い一発で釣り合いが取れてるんだよ」

「ん？ 今のは“重い”と“思い”を掛けた遠回しな告白かい？」

「今は平安時代か」

蛇足ではあるものの平安時代にはこのようないわゆる“掛詞”は存在せず、それよりもっとダイレクトで直接的な詩が多かったそうなので、つまりこの突っ込みは若干間違えてはいるが、それに対してまた突っ込み返せるほどの余裕が文虹里になかったのは言うまでもない。

文虹里はこうして上っ面だけの何の意味もない様な会話を繰り返して、日頃からのらりくらりと立ち回ることをモットーとしていた。それはつまり他人と必要以上に距離を詰めないということでもある。知人を作っても友人は作らない。愛人などもつてのほかである。

だがしかし、あるいはだからこそ、彼は彼女に選ばれたのかも知れない。裏表がないとまでは言わないまでも、表裏一体とまでもいかないまでも、そもそも文虹里正義にそんな極端な二つの側面など持ち合わせていなかったのだから。

2話 壮麗たる案内人

糸宇とのちよつとした談笑を終えた文虹里はある場所へと向かっていった。それは決して入学式会場ではない。彼はそこまで真面目で誠実な性格はしていない。といいつつ不真面目なわけでも不誠実なわけでもないのだが。

屋上。

この学校のとっぺんに、彼は向かっていた。

別に、将来自分はこの学校のトップになってやる！ということでも、そのげんかつぎという訳でもなく、純粹にこの学校の屋上に行きたかったのだ。最近は屋上の出入が禁止されている学校も少なく、そんな中でこの海無高校は昔ながらの屋上での昼食や、屋上での口マンチックな告白や、屋上でのシリアスな投身自殺などを体験できる数少ない生き残りなのだ。屋上が目当てでこの学校を受験したのではないが、受験した理由はこの屋上にあると言って良いのかもしれない。断っておくと、文虹里にとって屋上の存在がそこまで重要なのではなく、高校の選択の方こそがそこまで重要でないだけである。だからこの屋上に何か深い過去や思い出があるのではない。

ともかくそんな夢と希望溢れる屋上を、同級生の誰よりも先に体験したかったのだ。だからこそ文虹里はなまりになまった両足を無理に働かせ、階段を駆け上っていた。エレベーターもあるが、使うのがなんと無く憚^{はば}られたし、自分の足で上っている感覚を味わいたかった。

ちなみにこの学校は7階建て。階段で1回から全速力で走るのには

当然ながらかなりの労力を有するのだが、そんなことには構わず文虹里は黙々と階段を一段ずつ踏みしめていった。

そしてようやく最上階に到着。あとは目の前のステンレス製の扉を開けば、涼しく清らかな風が彼を迎えてくれるだろう。理由は不明だが何故だかそこには大きな姿見、鏡が置かれていた。おそらく屋上という多くの人々から見える場所に出る前に、きちんとした身なりをしないという意図で据えられているのあろうが、当の鏡自身がほこりをかむって汚くなっている。これではフリーターに「定職に就きなさい」と説教されるぐらいに説得力がない。

そんな鏡はさておき、早速文虹里はドアノブに手を伸ばした。

建物自体が円柱という一風変わった作りなため、当然屋上も丸い空間となっていた。丁寧に360度全面に柵が張りめぐらされていて、自殺予防に策を張り巡らせているようであった。

しかし文虹里が気になったのは柵ではない。

そこに佇みながら景色を窺^{うかが}っている1人の少女の方だった。

腰の少し上にまで伸ばした少女の艶やかな黒髪が風になびく。それにつられるようにしてスカートもなびき、色白の太腿が見え隠れする。もう一踏ん張りで下着が見えてしまいそうだ。

けれどそんな邪^{よこしま}な下心を働かせる余裕はなかった。それは、文虹里は不覚にもその少女に見惚^{みと}れてしまったからだ。これまで女性に対して抱いたどの感情とも混同し難い、不思議な高揚感を感じていた。

可愛くも美しくも華やかでも雅やかでもなく、彼女は神々しかった。その黒髪は、或いは黒神なのかと問いたくなるような、それほどまでの一線を画した神々しい後姿であった。

だから文虹里は、そんな神様のような彼女にまさか話しかけられるとは思ってもみなかった。

「ねえ、そこの君」

「……え。ぼくの……こと？」

「そう。あなたよ。あなたに訊ねたい事があるの」

黒神の彼女は唐突にそう切り出した。まるでその質問が、日頃から行っている挨拶かのように。

「『正義』の反対って何だと思っ？」

「せい、ぎっ？」

「但し、解に『悪』は存在しないものとする」

それは。

それはまさしく、今朝自分が考えていた事ではないかと、文虹里は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3972q/>

カガミノムコウ

2011年1月28日00時33分発行